

研究委員会企画シンポジウム 1

アートの教育の可能性を拓く—芸術系教科の授業削減計画再考—

企画者・司会者	佐藤 公 治 (北海道大学)
	内田 伸 子 (お茶の水女子大学)
企画者	茂呂 雄 二 (筑波大学)
話題提供者	郡司 明 子 (お茶の水女子大学附属小学校)
	森 實 祐 里 (札幌市立三角山小学校)
	宮崎 清 孝 (早稲田大学)
討論者	佐伯 胖 (青山学院大学)
	西野 範 夫 (前上越教育大学)
	奥村 高 明 (国立教育政策研究所)

企画の趣旨

近年、小・中学校などでも芸術系の教科の授業時間が削減されてきており、小学校では年70時間あったのが1998年には50時間に削減され、今日の学力低下論議の中でさらに授業時数が減らされるのではないかという危惧がある。しかし、今日の学力低下論議の出発点になったOECD-PISAの国際学力調査で重視されているのは決して数字の上の学力ではなく、表現能力を含めた広い意味でのリテラシー能力であり、日本の生徒はむしろこれらの学力が低下していることが指摘されている。このような中で、学校教育において広く言葉を含めて表現活動を豊かにすることは大きな課題になっているといえよう。これまで教育心理学会のシンポジウムでは、芸術系の教科や児童・生徒の芸術活動については積極的に取り上げてこなかった。

他方、人間は行為を通して環境と積極的に関わり、そのことによってさまざまなものを生み出していると考えられる一群の研究者がいる。たとえば、ヴィゴツキーや現象学者のメルロ=ポンティは、人間精神の根源とその生成は外部世界との身体的関わりを通して得られる意味の表現に求められると言う。表現するという行為は、外部に向かって心的内容とその意味を具体的に形成し、他者との共有を可能にするものである。同時にこの表現行為は自己の認識を形づくっていくものでもある。

このシンポジウムは、美術あるいは造形活動に焦点を当て、表現活動のもっている意味とその実践の可能性を考えることを目的に設定した。

はじめに、ユニークな造形教育の実践を小学校の現場で展開されている郡司、森實両氏、そして心理学の立場から造形・美術教育の現場に深く関わっている宮崎氏か

ら話題提供をしていただいた。その後、指定討論者である佐伯、西野、奥村の各氏より論点を提示していただき、フロアから出された議論を交えて今後の造形活動、美術教育のあり方等が活発に討議された。

アートの教育における子どもの学びを考える

郡司 明子

現在の学校教育ではアートの教育が十分に位置づけられているとはいえない状況にあるが、他方では子どもたちの多くは「図工」の時間を楽しみにしているのが現実である。アートの教育における子どもの学びとして考えるべきこととして、子どもが造形的な表現活動に夢中になれること、そして造形表現では自分で意思決定をしていくこと、表現のための素材や対象と向き合っていくことを通して自分を考える大きなきっかけとなっていくことがある。

本校では、2002(平成14)年度より新学習分野「アート」を立ち上げた。ここでは、教科の枠組みを見直して、子どもの生活から、学びを立ち上げていくことを試みている。学習分野としての「アート」では、身体をベースにおきながら、造形活動や身体感覚を活性化させ、他者と関わるコミュニケーションや遊びを豊かにしていくこと、生活や社会と関わりながら協働者としての生き方を学び、豊かな表現者となっていくことが目指されている。造形活動では、想像と創造が宿っている心身が外的な世界である「もの」「こと」「ひと」「場所」と交わり、触れていく中でつくる喜びや見る楽しみから意欲につながり、同時に自分たちの生き方にも影響を与えていく学びの実現を目指している。

具体的には以下のような実践を行っている。

- ・「もの」との対話：粘土のもっている素材の特質を活かした造形活動や、材木と関わる中で木との対話を展開している。木片を削るときにも繊維に沿えば、心地よい応答が返ってくると子どもたちは実感する。木の発する声(「木が嫌がっている」)に耳を傾け、時には「木が嫌がっている」といった感想を述べ、自らの手応えをもとに、対象との関わり方を調整している。「卵」から受ける印象を素直に絵画に表現する子どもたちの姿から「もの」と対話することによる可能性が実感される。
- ・なってみる「こと」から：青色のビニールを波や風に

見立て、自分たちが表現した「シーワールド」の世界に身体ごと入りこむ。そこで子どもたちは海の中にいる生きものになってみる、つまり造形表現としての対象そのものになってみることで、その世界を知り、味わうことができる。この体験を子どもたちは絵画制作へとつなげていく。あるいは「ハンド・ペインティング」では、自分たちの手に彩色をして、生きものの姿を表現することや美術作品に登場してくる人物を自分たちの身体で「真似をする」=なりきることで作品を「実感」している。

・「ひと」とともに：「切り絵」を仲間の作品とつなげて一つの作品をつくっていく試みや、筒の棒やストローをつないで立体のオブジェを協働でつくる造形活動は子どもたちの生活での協働の大切さを体験するきっかけをつくっている。多様な他者が、協働して表現活動を行う中で、異質な他者を知る。それぞれの思いが異なれば葛藤があり、ぶつかり合いがある。そこに折合いをつけ、乗り越えようとする過程に、「私と私たち」がみえてくる。

・アートな「場所」づくり：身を包む空間としての場所。人が集い語り合う居心地のいい場づくり、身体感覚に訴えるユニークな空間、暗闇の中の光の芸術。アートの視点で働きかけた場所は、想像力を刺激し、日常と非日常の往来を可能にする。

「アート」は子どもたちに異質な他者が存在すること、異質な人たちがつながり、見せ合い、語り合う場と体験を与えることができる。そのことは子どもたちの生き方を考えていく機会にもなっている。

鑑賞と表現の環流—彫刻とのふれあいを通して—

森實 祐里

本校の校区に「札幌彫刻美術館」がある。そこでは日本を代表する彫刻家・本郷新の作品を見ることができる。しかし、入学当初の子どもたちは公園に置かれている彫刻作品に興味を示さなかったり、裸であることに驚いたりした。大人にとっても身近に作品がありながら、美術館は敷居が高い場所であった。そこで芸術に触れる喜びを知り、自ら楽しめる人間になってほしいと願い、この美術館を拠点として、作品の鑑賞を通して表現する行為へと子どもたちが向かっていく実践に取り組んでいる。

私が受け持った3年生では、作品をいろいろな方向や角度から観たり、直接さわったり、素材の違いや大きさなど作品から受けるイメージを感じ取り、自分のお気に入りの作品を見つけることから始めた。子どもたちは野外に置かれている作品を布やブラシで洗ってあげるといった活動を通して、単なる物としての対象を超えて、まるで生きている人物のような捉え方をするようになった。このような子どもたちならではの感性を大切に、

またその作品の良さを味わうために、子どもたちが彫刻に直接語りかけ、インタビューするという形式をとったりもした。彫刻の気持ちになってインタビューに自ら答えることで、作品から受けたイメージがより鮮明になったといえる。

この実践では、彫刻に接したときに感じる心を起点にして、造形的な想いをふくらませていく鑑賞と表現との環流を図っている。通学路にぼつんと置かれている「奏でる乙女」の像を鑑賞し、一緒に演奏をしたいという思いをもった子どもたちは、彫刻作品を囲みながら演奏会を開き、その体験を絵に表すという活動へと向かっていった。また、本郷新が制作した彼と交流のあった人物の頭部像を鑑賞し、どこで知り合ったのか、何をしている人なのか想像を巡らせ、実際にこの頭部像に向かってまさに目の前にいる人物に尋ねるようにしてインタビューした。子どもたちは、自分たちもこれらの作品群とお友だちになって一緒に遊びたいという思いを絵に表していった。

以前には注目することもなかった野外彫刻に急速に親しみをもちだした子どもたちは、学校帰りや休日など気軽に彫刻美術館に立ち寄り、作品を見たり、館長さんとお話したりするようになった。また彫刻美術館の地域向けのイベントに協力しようということになり、まず学校内の児童たちに美術館の面白さを伝えようとして美術館の案内をするようになった。さらに、子どもたちの美術館に関連して制作した作品を美術館に展示してもらうことを依頼し、この美術館との結びつきを子どもたち自身の手で強めていった。

今や、彫刻美術館は子どもたちにとってかけがえのない「学びの場」となっている。4月に入学してきた1年生を美術館に案内したり、今まで彫刻美術館に行ったことがなかった自分の親を連れていき、得意げに彫刻の説明をする子どももいて、親がこの地域の中にある美術館をより身近な存在として見直すきっかけになっている。

このように繰り返し行った鑑賞活動で育んだ力が表現活動を深め、その表現活動から鑑賞活動が高まっていったといえる。それだけでなく人との関わり、ものに対する感性の高まりなど、さまざまな影響を与えている。

探索の場としてのアート—教育ができること—

宮崎 清孝

この15年間ほど、主として幼稚園・小学校のアートについて、優れたいくつかの実践に参加し観察・分析を行うことで、学校教育の中でアートがどのようにしてつくられていくかをみてきている。たとえば、小学校の美術の授業、幼稚園でのインスタレーション、同じく幼稚園